

持続可能な社会貢献システムの鍵は何か

「幕チャリ（幕張チャリティ・フリーマーケット）」の構成要素と ダイナミズム

2011年4月

藺田 奈央子

- 本論考は、藺田奈央子（神田外語大学外国語学部英米語学科 2011年卒業）が卒業論文として執筆したものに、指導教官の協力を得て藺田本人が加筆・修正し、公開用に再編したものである。
- ここに述べられた見解は、あくまでも筆者個人の見解である。
- 本論考からの無断引用等は固くお断り申し上げます。

要 約：

「幕張チャリティ・フリーマーケット（通称：幕チャリ）」は、「半歩でできる社会貢献」を目指して、2005年に学生ボランティア約35人、来場者1,000人の規模で始まった。それ以降、年に一度継続的に開催され、2010年の第6回目では学生・社会人ボランティア約150人、来場者2,600人の規模にまで発展してきた。

幕チャリでは、フリーマーケットをプラットフォームに「物」「時間」「お金」という3つの寄付を運動させて、社会貢献のための寄付金が創出される。この一見シンプルに見える仕組みには、実は、自律的なシステムとしてその持続と発展を可能にする要素が内包されているのではないだろうか。なんとなく継続してきたのではなく、そこには、社会貢献システムとして持続可能でありうるための鍵が内在しているのではないか。本論文は、その鍵となるものを明らかにすることが目的である。

第1章では、幕チャリの概要と、幕チャリ誕生から地域の春のイベントにまで成長していった要因を論じていく。第2章では、幕チャリを特徴づける構成要素を抽出することで、幕チャリというシステムの構造とその優位性を考える。第3章では、そのシステムを駆動させるダイナミズムを考察し、幕チャリの持続と発展を導き出す内在的な能力を分析する。

こうした論述を通して浮かび上がってくるのは、幕チャリとは、「ネットワーク」を基盤とするきわめて現代的な「連携のシステム」であって、学生という存在に固有の「人材の新陳代謝」と「充滿するエネルギー」を駆動力に、「Win-Winの連鎖」を学内や地域に生み出しながら、社会のために役立ちたいという「自己実現の希求」を充足すべく、自律的に持続と発展が探究される「場」であるということである。換言すれば、幕チャリとは、単発的なボランティア活動のイベントではなく、「連携」「システム・デザイン」「内発的エネルギー」の三つが相乗的に機能している時空間なのだ。そして、そうした相乗機能の確立こそが、持続可能な社会貢献システムの鍵なのである。

その意味では、幕チャリは、今後も持続し、発展する可能性をおおいに秘めている。また、他大学や他地域へも「輸出」可能なビジネスモデルだとも言えるのではないか。

幕チャリの本質を一言で繰り返せば、「みんなで心を合わせて半歩だけ踏み出すチャリティ」であり、「楽しみながらできる気軽なチャリティ」である。それでも、途上国にとっては大きな貢献となる。小さな力の繋がりで大きな力を引き起こすムーブメントとして、今後も幕チャリが継続・発展していくことを願ってやまない。

目次

はじめに	4
第1章 幕チャリの概観と推移	
1-1. 誕生から定着へ	5
1-2. 幕チャリを育てた「外からの支援」	8
1-3. 幕チャリを育てた「内からの改善」	11
第2章 幕チャリを特色づける構成要素	
2-1. 「三つの寄付」を連動させるフリーマーケット	13
2-2. Win-Win の連鎖	15
2-3. フラットなネットワーク	17
2-4. 熱い想いの同心円	18
2-5. 大学を母体とする恩恵	19
2-6. 寄付金活用へのこだわりと共感	21
第3章 幕チャリに内在するダイナミズム	
3-1. 「所属の欲求」の充足	25
3-2. 「承認の欲求」の充足	27
3-3. 「自己実現の欲求」の充足	28
おわりに	30
参考文献	32

はじめに

「幕張チャリティ・フリーマーケット」(以下「幕チャリ」と略す)は、「物」「時間」「お金」という3つの要素をフリーマーケットで連動させ、神田外語大学の学生が中心となって企画・運営をするチャリティ・イベントである。2005年に学生ボランティア約35人、来場者約1,000人の規模で始まった幕チャリは、6年後の2010年には学生・社会人のボランティア約150人、来場者約2,600人の規模にまで発展してきた。年々、協賛する企業や団体が増えると同時に、地域住民からの寄付品も増え、幕チャリが幕張地域¹の春のイベントとして定着してきたことが伺える。

それでは、このように幕チャリが持続し、発展を遂げ、それを支えるサポーターやボランティアが着実に増加を続けてきた理由はいったい何だったのだろうか。幕チャリでは、学内の誰でもが参加でき、近隣の企業や地域社会も参画できる仕組みを確保することで、社会貢献と同時に大学内の活性化や地域の活性化も目指そうとされてきた。果たして、それは成功してきたのだろうか。

筆者は、第5回(2009年)の代表として幕チャリに関わった経験をもとに、幕チャリが持続可能なダイナミズムを本質的に内在する仕組みであることを本論文で明らかにしてみたい。チャリティを目指し、社会的に良いことを行っているというだけでは、組織の維持も継続も容易でない世の中で、幕チャリはいつ途切れたとしてもおかしくない存在と言えた。だが、現実には、幕チャリは持続し、発展を遂げてきた。その鍵に迫りたいと思う。そして、この鍵と仕組みを次世代にも引き継ぎたいと願う。

本論文では、まず第1章で幕チャリの概要と変遷を概観し、第2章で幕チャリを特徴づける基本要素を抽出する。それらを踏まえた上で、第3章では、幕チャリを牽引するダイナミズムを考察し、幕チャリに本来的に内包されていると考えられる持続・発展のための潜在能力を分析する。

なお、本論文では、幕チャリを「持続可能な社会貢献システム」と考える際の比較対象の集積や、幕チャリを「ビジネスモデル」として他大学や他地域へ輸出可能とするための条件の分析などがまだまだ不足している。幕チャリが「汎用的な社会貢献システム」としてより完成度を高めていくには、こうした深化が不可欠であるが、他日を期するとともに、これから幕チャリを担う仲間にも本論を越えて行ってくれるよう冒頭をお願いしておきたい。

¹ 幕張地域という時には、海浜幕張駅(JR京葉線)、幕張駅(JR総武線)、幕張本郷駅(JR総武線)の3駅に囲まれた地域を総称している。

第1章 幕チャリの概観と推移

1-1. 誕生から定着へ

「幕張チャリティ・フリーマーケット」、通称「幕チャリ」は、本学の「組織コミュニケーション論」（和田純教授担当）の授業²から、2004年に生まれた。学生や市民がより気軽に、かつ日常的に社会貢献できる「新たな社会システム」の創出が議論される中で、イギリスにおける日常生活に馴染んだチャリティショップ（Oxfam³）の浸透に感銘を受けた学生が、日本にもそのようなチャリティ文化やシステムを構築したいと考えたことがきっかけであった。授業での論議はやがて企画書にまとめられ、「ソニーマーケティング学生ボランティアファンド」⁴の選抜を経て助成金を得たことから、実現に弾みがつく。そして、学内の異文化コミュニケーション研究所からの全面的なバックアップを得ることで、2005年5月に、神田外語大学キャンパス（幕張）で第1回が開催されるに至ったのである。その後、2010年までに計6回の幕チャリが継続開催されてきた⁵。

幕チャリでは、フリーマーケットで販売される商品は幕張の地域住民・企業・学生・教職員から寄付されたもので、販売を受け持つのは学生ボランティアである。会場は誰でも出入り自由で、当日は、学内団体や外部団体によるパフォーマンス、協賛団体が出展するフード、オークションなども盛り上げに一役買っている。そして、当日の売上金と寄付金⁶はまとめて幕チャリから非営利組織に寄付され、最終的に社会や世界に役立てられる形でチャリティが完結する。

その特色を一言で言うならば、「チャリティ」と「フリーマーケット」を組み合わせたオリジナリティにある。フリーマーケットという身近なプラットフォームを利用しながら、色々な人が様々な形で気楽にチャリティに参加できるイベントを考えたことに、その心髓

² 「組織コミュニケーション論 II」として後期に開講され、現在も継続しているもので、大学や地域をリソースとして捉える中から、社会貢献に繋がる企画の立案がテーマとされている。

³ 1942年に英国のオックスフォードで設立された民間団体で、1948年からチャリティショップを展開、現在は世界のNGOの連合体 Oxfam International となっている。99カ国で貧困克服のための支援を行い、100万人近い人々から寄付金約560億円をもとに35,000人以上のボランティアが活動している。幕チャリのモデルとなったチャリティショップは現在英国に700近くある。特定非営利活動法人 オックスファム・ジャパン: <http://oxfam.jp/> Oxfam Great Britain: <http://www.oxfam.org.uk/shop/content/aboutourshops.aspx> より引用。

⁴ ソニーマーケティング株式会社のCSR事業として、楽しみながら自らも成長し社会貢献につながるボランティア活動を募集し、選考の上、助成を行う。大学生の社会参加への第一歩となり、社会をより良くしていこうとするリーダーシップの芽生えとなるボランティア活動を支援している。2004年の第4回助成への応募97件から22件が採用された中に幕チャリが入り、20万円の助成金を得た。

⁵ 2007年からは学園祭である「浜風祭」においても小規模な形で幕チャリが開催されるようになったが、本論文では、毎年5月に行われる大規模な幕チャリに焦点を合わせている。

⁶ 来場者や町内会長から寄せられる釣銭の寄付や現金寄付で、売上げとは別に計上している。

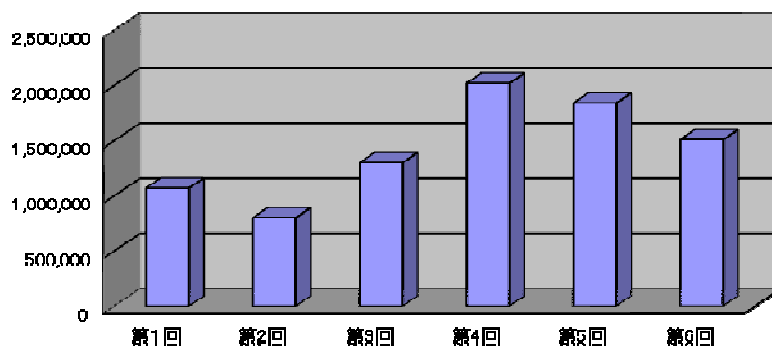
がある。日本に根付いていないチャリティという精神を広めるため、「大きな一歩」を求め
るのではなく、「ちょっとした半歩」でチャリティに参加できる大学発の仕組みを産み出し
たことが特徴だと言い換えてもよい。

幕チャリは、本学の学生からなるボランティア組織「CUP(Create Universal Peace)」が
主催者となって企画・運営をし、様々な企業や団体、個人と結びつき、創り上げられる。
とは言え、その運営主体である CUP は、実は固定的な「団体」ではない。CUP は学生自
治会にあたる学友会に属する「部」でもなければ、サークルにあたる「同好会」や「愛好
会」でもない。6年を経た今でも、CUP は任意のボランティア組織に過ぎず、頻繁にメン
バーが入れ替わっていく極めて流動的な「ネットワーク集団」なのだ。

幕チャリにおいては、フリーマーケットはモノをお金に換える手段ではあっても、イベ
ントとしてのフリーマーケットを開催すること自体が目的になることはない。むしろ目的
は、チャリティ活動を実行する「場の提供」にこそあって、その実行の場がたまたまフリ
ーマーケットの形式をとっているに過ぎない。それゆえ、参加メンバーを固定化し、開催
を定例化し、他者に参加や協力を強制するようなことはもとより想定されていなかった。
個人の参画は、あくまでも当事者の主体性・自主性に任せられているのである。従って、
主催者の CUP 内においても、特定の者からこうしろという指示はない。CUP は固定的な
「団体」ではなく、あくまでも変幻自在で自由な「ネットワーク集団」であることが大き
な特徴となっている。どのような内容にしたいか、いつどこで幕チャリを開催したいかな
ど、全てのことは参加者の自由な意思決定に任されているのだ。

幕チャリの開催は 2 日間のみである。その 2 日間で生み出される売上と寄付金の総額の
推移は図 1 の通り⁷である。天気の影響やボランティア人数の変動などの要因により、年
によって寄付額にも変動があるが、わずか 2 日間の開催で 100 万円を超える（年によっては
200 万円を超える）お金を生み出してきた仕組みは評価されてよいだろう。

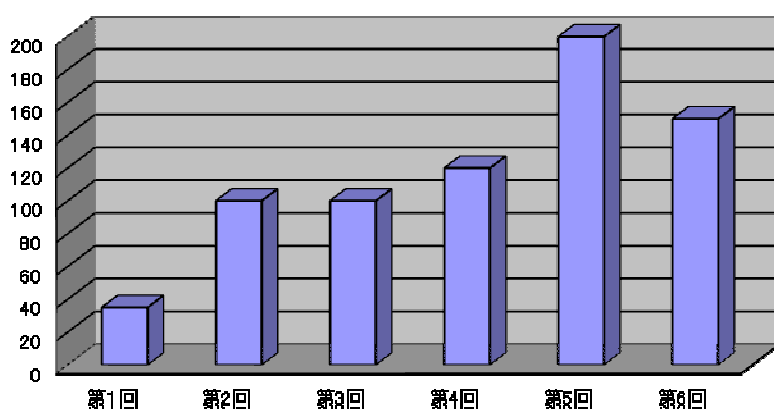
図 1 幕チャリから非営利組織への寄付額



⁷ 幕チャリの「開催実績と寄付先」<http://www.kuis.ac.jp/icci/student/cup/achievement.htm> より筆者作成。図 2・図 3 も同じ。

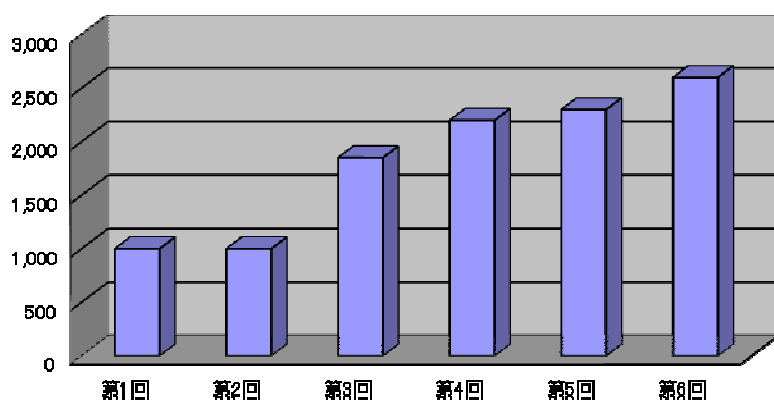
そして、その仕組み自体も着実に成長してきている。途切れることなく第 6 回目を迎えるに至ったこと自体が証拠と言えるかもしれないが、学内・地域を問わず、幕チャリという「場」が広く認知され、定着してきたことは間違いない。一例を挙げると、まず、学生ボランティアの増加が指摘できる。図 2 からわかるように、幕チャリを運営する学生ボランティアの数はコンスタントに伸びてきた。第 5 回が特に多かったのですが、第 6 回は減少したように見えるが、それを踏まえたとしても、学生ボランティアの数は 6 年間で 3 倍増となっている。この間の本学の学生総数の増加が 1.1 倍⁸でしかないことを考えると、学生の意識に変化がもたらされてきた結果だと言ってよいだろう。

図 2 学生ボランティア数



また、来場者の増加もめざましい。図 3 からわかるように、入場者は 6 年間で約 2,500 人へと 2.5 倍増になってきている。学生の参加が中心となる大学祭とは異なって、幕チャリの場合は地域からの来場者が中心となることを考えると、来場者の着実な増加こそが幕チャリの定着を示す指標だと考えてよいだろう。

図 3 来場者数



⁸ 神田外語大学における学生総数は、2005 年が 3,060 人で、2010 年が 3,534 人であるので、その間の増加率は 1.1 倍である。

ほかに、おなじく 6 年間で、寄付品を提供してくれる協賛企業は 1.2 倍、ポスター掲出などを行ってくれる商店・レストランなどの広告掲出協力場所は 4.5 倍に増加している。地域住民からの寄付品の提供がコンスタントに継続している事実などとも考え合わせると、幕チャリの定着・拡大を実感させるものは多い。

このように、授業の中から生まれた幕チャリは、6 年の時間をかけて、学内においても、地域においても大きく育ち、今や「春の幕張名物」と言われるまでに存在感を示すようになっていく。その生長の本質的な鍵は、幕チャリというシステム自体に内包された構成要素と、それらを活かして自律的に牽引するダイナミズムにあると思われるが、その分析は第 2 章以降に譲るとして、その前に、幕チャリの規模や運営に変化をもたらすことになった要因とその変遷を見ておこう。

1-2. 幕チャリを育てた「外からの支援」

幕チャリの規模や運営に変化をもたらしてきた要因としては、大別すると、新たな主体の参加や新たな支援体勢の提供といった「外からの支援」と、パフォーマンスの導入やフードの充実といった「内からの改善」の二つがある。これらが年々拡充し、相乗的に作用することで幕チャリの規模や運営は大きく変化してきた。まず、「外からの支援」の主要なものを時系列的に整理すると、図 4 の通りである。

図4 「外からの支援」

* 黄色は団体が参加した回を表す（幕チャリ公式HP 協賛団体から一部抜粋）

名称	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回
広報						
幕張公民館						
幕張西公民館						
幕張町内会						
幕張西自治会						
幕張ベイトウンコア						
幕張ベイトウン自治会連合会						
幕張ベイトウン商店会						
リトルハウス						
フード						
神田外語大学同窓会						
OI'mO～あいむ～						
神田外語大学留学生会						
SII労働組合幕張支部						
マクスタ						
ELI						
オークション、パフォーマンス						
(株)ブリティッシュヒルズ						
(株)千葉ロッテマリーンズ						
幕張Heart'S						
高浜第一小学校「SAMURAI×浜っ子」						
阿里耶、Kana*P、古瀬陽子						
ベイトウン中年バンド						
学生団体(Jazz研、Step In等)						
その他						
ソニーマーケティング学生ボランティアファンド						
幕張新都心まちづくり協議会						
幕張新都心賑わいづくり研究会						
千葉県後援						
千葉県後援						
国際親善サッカー大会事務局						
神田外語大学学生団体支援制度						
IES全米大学連盟東京留学センター						
(株)スタートトゥデイ						
イオンリテール(株)						

前節で述べたとおり、幕チャリ発足にあたって最初に背中を押してくれたのは、ソニーマーケティング学生ボランティアファンドからの資金助成である。この支援がなければ幕チャリは机上のイベントで終わっていたかもしれない。幕チャリの発足には、輸送、宣伝、

ブルーシートの準備だけでも相応の経費が必要であったので、最初の一步に際して資金援助が得られたことはきわめて重要であった。

次に、幕チャリが地域に開かれたイベントとして成長していく上で大きな助けとなったのが「幕張新都心賑わいづくり研究会」である。2006年に千葉県、千葉県企業庁、千葉市で構成する「幕張新都心活性化プロジェクトチーム」が設置され、立地企業、文教地区（学校）、地元自治会・商店会など計40企業・団体との意見交換が始まる中から、2006年10月に発足した研究会である。構成団体の積極的な連携・協力を通じて、幕張新都心の賑わい創出を目指すということで、やがて幕チャリにも注目されるようになり、第3回（2007年）以降、幕チャリは地域イベントとして大きく発展することになった。学生にとっては、社会人の前で直接的に幕チャリへの協力を依頼するという試練が始まり、フェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションの上達が要求されるとともに、社会から認められる喜びともなった。2009年には、幕張新都心発足20周年記念という節目の年に幕チャリが5周年を迎えたこともあり、本格的なコラボレーションとして、幕チャリは「春のカイマク祭」⁹の中心イベントとして位置づけられるまでになった¹⁰。

また、個別の企業からの支援も大きな援軍であった。好例はセイコーインスツル(株)からの支援である。当初は広報中心の協力だったが、年を重ねるごとに密接な結びつきとなり、やがて、自主広告の掲示や社員からの寄付品提供、フードブースの独自出店、寄付品を一時保管する倉庫の提供にまで協力が拡大していった。一貫して、積極的・能動的に幕チャリを支えてもらえる重要なパートナーだと言ってよい。また、幕張にこだわりを持つ(株)スタートトゥデイは全社を上げて協力的で、毎回多くの寄付品が提供され、イオン(株)（現在はイオンリテール(株)）からの寄付品と並んで大きな比重を占めている。リトルハウス(株)には、広報誌『リトルハウス通信』やカタログに無償で宣伝を載せてもらっている。ほかにも、図4に記したように様々なところから色々な形で支援があり、いずれも企業の得意分野をもとに積極的に企業側から提案されたものだ。不景気にも関わらず、このように幕チャリが毎年企業から支援を受けられることは大変ありがたく、幕張新都心の中で企業と大学が隣接している大きなメリットだといってよいだろう。

外からの支援はこれだけにはとどまらない。地元、地付の協力は盤石の立脚基盤であり、大きな推進力でもある。寄付品の募集や広報の面で町内会や自治会、そして公民館の協力は不可欠¹¹であるが、当初は幕張、幕張西区域のみだったのが、第4回（2008年）からはベイタウン地域にも協力の輪が広がった。幕張地域の活性化を目指して情報ブログコミュニティを立ち上げている「マクスタ」は、幕チャリ用のブログの提供だけでなく、フード

⁹ 「カイマク」＝「海浜幕張」「春の開幕」「快い幕張」等の意味が込められている。

¹⁰ カイマク祭のパンフレットやフリーマガジン「C plus」（千葉県全域に120,000部無料配布）、月刊情報誌「ぐるっと千葉」に掲載され、CUPの知らないところで幕チャリはどんどん広まっていた。

¹¹ 町内会・自治会では回覧板とポスターの掲示、公民館では地域住民からの寄付品受付として場所の提供と広報協力をお願いしている。

ブースの出店にも協力的だ。地元球団の榊千葉ロッテマリーンズからは、オークション用の選手グッズが提供されるとともに、専属チアパフォーマー「M☆Splash!!」が派遣され、また、ベイタウン在住の「中年バンド」や幕張地盤の「よさこいソーラン」などもパフォーマーの常連である。第5回（2009年）からは、幕張所在の「IES 全米大学連盟東京留学センター」に所属する留学生も、ボランティアとして販売に参加するようになった。

そして、幕チャリが成長するにつれて、大学からの支援も厚くなっていった。第1回から協力を得た神田外語大学同窓会を始め、神田外語大学留学生会、ネイティブの語学教員からなる English Language Institute (ELI) など、学内の組織も続々と幕チャリに参加し、幕チャリを支えてくれている。幕チャリが一つのきっかけとなって、後述する「神田外語大学学生団体支援制度」という助成制度が発足したことも重要であるし、オープンキャンパスでの告知、学内倉庫の貸出しなど、今や大学は全面的に協力的だ。

以上のことからわかるように、幕チャリは実に様々な「外からの支援」を受けながら成長を遂げてきた。幕張という居住地域・文教地域・経済地域がコンパクトに一体化された特殊な立地が、これほど多様なセクターを巻き込むことを可能にし、雪だるま式に幕チャリを大きく発展させてきたと言えるだろう。地域に根ざし、ネットワークを活かして稼働する幕チャリだからこそ、こうした「外からの支援」は重要かつ必須で、それらが幕チャリの規模と運営の拡大に不可欠な踏み台を用意して来てくれたことは感謝しても余りあるものである。

1-3. 幕チャリを育てた「内からの改善」

と同時に、幕チャリの規模と運営の拡大にとっては「内からの改善」も重要であった。具体的には、ボランティア募集や受入れ方法の改善、フードブースやオークションの展開、パフォーマンスの導入などといった自助努力による改善である。

幕チャリは、神田外語大学内の校庭・広場・芝生にまたがる縦約 70m、横約 150m の空間（約 1 万㎡）の全面を使って開催されるため、当日の販売には多くの人手を必要とする。そのため、十分な人数の販売ボランティアの参加が得られるかどうかは、売り上げを左右する鍵になる。そこで問題になるのが、どういう機会に如何なる形で学生にアピールするかである。初期には友達の人づてが中心であったが、第3回（2007年）以降は、大学の理解を得て¹²、新入生約 800 人の前で幕チャリのボランティア募集をすることができるようになった。のみならず、学長や学務部長からも、保護者会の際などに幕チャリが話題とされるようになり、保護者への浸透も進んだ。こうしたボランティア募集方法の改善と拡大は、幕チャリの基盤を築くという意味できわめて重要なものであった。

と同時に、集まったボランティアをどのようにまとめていくかの改善も試行錯誤されて

¹² 2007 年は神田外語大学創立 20 周年にあたったことから、その記念事業イベントとして幕チャリが位置づけられ、大学からの支援が拡大されたのがきっかけとなった。

きた。ボランティアを動機づけ、自らの思いで動いてもらえるように環境を整えることは容易ではない。そこで第3回の頃から自然に編み出されたのが「班長」である。コア・メンバーとは別に、受け持つ仕事ごとにグループを作ってもらい、そのグループの世話役が「班長」として自主的に立ち上がる仕組みである。「班長」が自分の創意工夫で販売ボランティアと準備を進めてくれることで、コア・メンバーは自分の作業に集中できるようになり、また当日の現場もグループの裁量で自由に改善されていく。「班長」が編み出されてからは、集まってくれたボランティアが行き場を失うということもなくなり、作業効率が上がるだけでなく、幕チャリの趣旨やミッションの共有という目に見えない重要なポイントも浸透が深まり、幕チャリ全体の密度と質が一気に高まった。「チャリティ (=できるだけ高く買ってもらって寄付金を増やす)」と「フリーマーケット (=安くしてでもさばいて売り切る)」という相反するものを結びつける時、幕チャリでは値引きはしないという原則が優先されなければならない。幕チャリの趣旨が共有されていない現場では、ともすれば、簡単に値引きがされてしまう。しかし、班長がコア・メンバーとボランティアのつなぎ役となり、密にコミュニケーションがとれるようになったことで、こうした事態は回避されるようになった。一方で、幕チャリ当日の終盤にさしかかる頃には、在庫として大量の商品を倉庫に眠らせておくよりも1円でも多く換金し、社会の役に立てようという考えのもと、一度に2点の商品をまとめ売りする「2 for 1 (1つの値段で2点の商品を購入することができる)」といった妥協も必要となる。単なるフリーマーケットではない幕チャリの趣旨や立ち位置があるため、こうした幕チャリの趣旨の共有をはかりつつ、同時に現場では臨機応変な対応をこなすという点で、「班長」の役割は大きい。

また、第1回からオークションを実施し、フードブースを出すとともに、第3回からパフォーマンスの実演を導入したことも、「内からの改善」としては重要である。これらが加わることで、来場者の客足が伸び、満足度が向上し、滞在時間も増える。目玉商品を競り落とす楽しみもあれば、パフォーマンスを楽しむこともでき、食事もできるといった条件の整備は、フリーマーケットに来場者を引きつけ、より長い間滞在してもらうための工夫として不可欠であった。チャリティ目的ではあるが、来場者の人出に結果が左右される以上、通常のフリーマーケットと遜色のない、あるいはそれ以上の場を作り出すことは不可避であったのである。もっとも、オークションの品物は通常販売のものよりもはるかに高額で競り落とされ、食事には躊躇なくお金が使われるので、こうした工夫は、幕チャリの売上総額、つまり最終的な寄付金額を大きく伸ばすためにも役立っている。また、学内と地元のパフォーマーが参加してくれることで、恰好の地域交流の場ともなっている。イベント的に流れすぎないように、あくまでもチャリティ目的であることを繰り返し伝える努力が逆に必要となるが、こうした工夫は、幕チャリが「春の幕張名物」として定着し、想像以上の寄付金を産み出せる仕組みとして機能していく上で欠かせないものとなった。

このように、幕チャリが成長し、持続的なイベントとなっていくにあたって、「内からの改善」も大きな役割を果たしてきたのである。

第2章 幕チャリを特色づける構成要素

確かに、上述のような「外からの支援」と「内から改善」は幕チャリの成長にとって欠かせないものであった。それらは極めて重要で、かつ、極めて大きな援軍だったと言ってよい。

しかし、同時に、筆者は、そうした要因のみによって幕チャリが育ってきたとは考えていない。筆者はむしろ、幕チャリが成長し、持続的に展開してきた力は、実は、幕チャリというシステム自体に固有に内包されている構成要素と、それらの要素を活用することで幕チャリを牽引していった自律的なダイナミズムに依拠するところがより大きいのではないかと考えている。

そこで本章では、まず、幕チャリというシステムに固有と考えられる構成要素を抽出することとしたい。そうした要素の複合的な組み合わせにこそ、幕チャリの「持続」と「発展」を確実に産み出す基盤があると考えられるからだ。

2-1. 「三つの寄付」を連動させるフリーマーケット

幕チャリを構成している最も基本的な要素は、「物の寄付」「時間の寄付」「お金の寄付」という三つの寄付を自由に組み合わせられる点にある。どの形の寄付であれ参加者が自由に選べ、自分の可能な範囲で社会貢献ができるように選択肢が用意されているのである。

具体的には、「物の寄付」とは、フリーマーケット当日に販売される物の無償提供のことである。衣類やタオルなどの布類、食器やガラス、おもちゃや生活雑貨などが中心で、寄付者は幕張地域やベイタウン¹³の住民、協賛企業とその社員、本学教職員や学生である。個人からは「捨てるにはもったいない」レベルの物が寄付され、企業からは新品の余剰品やサンプルが提供されるのが通常で、年々、寄付品の数は増え続けてきた¹⁴。「もったいない」というエコの意識と「役に立ちたい」という貢献の意識が、物で溢れる日本という環境下で相乗作用しているからか、ありがたいことに「物の寄付」は途切れたことがない。

「時間の寄付」とは、端的に言えばボランティアとして活動することである。寄付品の集荷、分類、値付け、広報、設営、販売など、事前準備から当日の現場まで、幕チャリの運営には非常に多くの人手を必要とする。その需要を埋めてくれるのが「時間の寄付」と

¹³ JR 海浜幕張駅後方に位置する住宅地。官民パートナーシップのもとに、千葉県と住宅事業者が連携して魅力的な都市デザインと、新しい時代の社会的ニーズやライフスタイルに対応した快適な居住環境の整備を進め、1995年3月に入居開始。2010年1月末現在で約23,100人が居住。千葉県企業庁HP「幕張新都心によるこそ」：

http://www.makuhari.or.jp/n_area/area_baytown/より引用

¹⁴ 寄付品受け渡しに要する負担の軽減、集まった寄付品の保管場所の確保という新しい課題が浮上するほど、寄付量は増え続けている。他方、寄付と廃棄の区別がない事例もあって、不要品回収に陥りかねないリスクも排除できない。

いう形で参加してくれるボランティア、とりわけ学生ボランティアである。学内では、誰がいつ来ても参加できるように門戸を開放しており、空き時間に気軽に時間を提供し、早くボランティアとして活動してくれる学生の存在は極めて大きい。学生を基盤としなければ募チャリは成立しないと断言してよい。また、当日には、食品販売やパフォーマンスに参加するなど、近隣企業の社員や地域住民からもボランティアとして「時間の寄付」が行われる。

「お金の寄付」は、募金箱に直接寄付金を入れるという方法もあるが、募チャリの場合に最も注目すべき点は、募チャリで商品を買うという行為そのものが「お金の寄付」となっているということである。自分が欲しい物を楽しみながら安く購入してもらえば、その売上は自動的に社会をよくするために使われていくシステムが最初から組み込まれているからである。皆にとって嬉しい Win-Win の仕組みと言ってよく、通常の現金寄付とは異なっていて、募チャリにおける「お金の寄付」は抵抗なしに（むしろ楽しみを伴って）達成できる形となっている。

このように、募チャリではこうした三つの寄付の形が自由に選べ、自由に組み合わせて達成できるようになっているが、それを可能としたのが、これら三つの寄付をフリーマーケットという「場」で連動させるというアイデアである。

フリーマーケットは常設でない不安定な場であり、場を設定する主催者は一応存在するものの、場の成否はあくまでも参加者の主体性に依拠しており、場の価値も参加者の満足度で決まる極めて流動的な場である。言葉を換えれば、不安定な場を意味あるものにするために、ひとえに参加者の能動性が問われるのがフリーマーケットである。そして、その能動性を引き出す原動力は、売り手にとっては「安くてもよいから、喜んでもらえそうな良品を提供して買ってもらう」という挑戦であり、買い手にとっては「できれば安く、掘り出し物を自力で発掘して手に入れる」という挑戦にある。

こうした双方の挑戦が交錯し、能動性に転化していくフリーマーケットのプロセスに、募チャリでは三つの寄付を選べる形で組込み、社会貢献というさらに大きな使命感と充足感までも満たせる仕組みとしたのである。その結果、売り手も買い手も参加者全員が能動性を発揮することになり、フリマを楽しみながら誰もが自然にチャリティの主体となれる場が実現することとなった。半歩だけであっても全員が踏み出すことで、能動性の集束が大きな力に転化していく場が、フリーマーケットの形式を借りる中で誕生したと言い換えてもよい。

なお、募チャリでは、寄付品を売って全て現金化し、その上で最終的にお金を非営利組織に寄付する形をとっている。それは、衣類などをそのまま提供するよりも、お金という融通性のあるものに置き変えた方が、様々なニーズに対応できてより有効であると考えているからである。この観点から見れば、募チャリ自体が最後の最後に「お金の寄付」を代行しているとも言えるが、その「換金」のためにもフリーマーケットという場の確保は不可欠となっている。

2-2. Win-Win の連鎖

前項でも少し触れたが、幕チャリを構成するもう一つの要素は「Win-Win の連鎖」である。誰もが何らかの形で喜びや楽しさ、満足感を感じられることは、これまで幕チャリが多くの人々によって支え続けられてきた最も大きな要因である。持続的な開催と発展には、能動的な参加者の誰もが「Win-Win な関係」を実感できることが欠かせない。

まず、運営を担う学生ボランティアにとっては、何といても、机上の勉強からでは学べない様々な経験をできることが大きなメリットとして挙げられる。企業関係者、地域住民、教職員など多様な社会人との接触が一気に開花するインパクトは極めて大きい。大人を交えての企画・運営で苦勞するのは当然のことながら、アポイントメントの取り方、名刺の渡し方、プレゼンテーション、敬語、マナーといった初歩から、報告、連絡、相談の重要性、さらには、建設的に批判しあいお互いの努力を評価しあうコミュニケーションの大切さなど、貴重な勉強ができるのである。関わりを持った多様な人々から刺激を受け、視野が広がることも少なくない。こうした経験はやがて自信に繋がり、就職活動や他の活動においても大きな糧となっていく。友達がたくさんできたり、チャリティに深い関心をもったりという効用もあるから、学生生活を充実させる上ではプラスのメリットしかないと言ってもいいだろう。事実、そうした様々な点にやりがいや面白さが見出されてきたからこそ、幕チャリの担い手は途切れることなく再生産されてきている。

大学にとってのメリットは、まず大学に対する認知度の向上と地域への貢献である。学生が地域社会や企業に積極的に入り込んで行くことで大学の知名度は確実に上がり¹⁵、キャンパスで幕チャリを開催することで、地域住民が大学に足を運ぶきっかけが作られ、地域住民にとって大学の扉は確実に低くなってきた。大学が地域に根を張る一つの足掛りとして、幕チャリも機能してきたのである。その結果、地域住民が本学の講座を聴講したり学園祭などに来訪したり、あるいは学生が地元の小学校に招かれたりと、施設の開放や地元との交流にも波及効果が及んできたことは疑いない。のみならず、学生が自主的に社会との関わりを持って成長し、目標に向かって仲間と努力している姿を内外に示すことは、学内の活性化に繋がるばかりか、学外から見た大学イメージの向上にも役立つ¹⁶。神田外語大学が総合的な人づくりを目指す一助ともなるだろうし、昨今話題になっている「人間力」育成の一例とすることもできるだろう。学生が毎日楽しそうに活動をし、充実した生活を送っている大学では、大学自体も元気なのである。

そして、地域にとってのメリットは、自ら属するコミュニティ幕張が若い人たちの力で元気になることにある。国道 14 号線を境として、旧幕張側（京成幕張駅方面）は元々の地付きの住民が多く、高齢化が進み、やや「シャッター商店街」的な様相を呈している。こ

¹⁵ 幕チャリの初期には、同じ幕張の町内に神田外語大学が存在していることさえ知られておらず、キャンパスの位置も住民は知らなかったという。それが大きく変化していく上で、幕チャリが果たした役割は十分に評価されるべきだろう。

¹⁶ 第 2 回から大学が公式にプレスリリースを県庁記者クラブに出すようになった。

れに対し、新幕張側（JR海浜幕張駅方面）は巨大なビル群と商業施設が中心で、大企業とベイタウン住民に象徴される近代的都市である。この両者はこれまで十分な接点がないまま来たというが、ちょうど中間地点に位置する神田外語大学で幕チャリが始まったことで、地域全体をつなぐイベントが成立することになった。その効果のほどは今後の結実を待つ必要があるだろうが、「共通の場」ができたことの意味は少なくともあるだろう。のみならず、家の大掃除を兼ねて幕チャリへの寄付品を探すことが毎年恒例のこととして定着したとのことで、地域における「共通の時間軸」が形成され、さらには、社会貢献に喜びと充足感を感じるという「共通の価値観」も形成され始めたようだ。今では、寄付品募集のチラシは抵抗なく町会や自治会の回覧に組み込んでもらえるようになったし、幕張公民館、幕張西公民館、ベイタウンコアといった公共施設も収集拠点として協力してくれるようになった。千葉県も千葉市も協力的で、2006年に結成された「幕張新都心賑わいづくり研究会」で本学関係者が主要な役割を果たすようになったのも、元を言えば幕チャリとの連携からである。ひとつの「地域おこし」の場として、それだけ幕チャリが地域に根付いたということだろう。事実、毎年、幕チャリの時期になると部屋を掃除しながら寄付品の準備をしてくれる人がある。毎年、公民館に何度も足を運んで寄付品を提供してくれる根強い幕チャリ協力者もいる。そして、そうした人々は、幕チャリ当日には必ず大学まで足を運び、学生と交流していく。14号線では分断できない人の輪が着実に築かれているわけで、地域の活性化に幕チャリが貢献していることは疑いない。

企業にとってもメリットは大きい。今日の企業にとって「良き企業市民（Good Corporate Citizen）」として地域で役割を果たすことは必須命題となったが、CSR（Corporate Social Responsibility）の位置づけを超えて幕チャリに協力し、地域貢献に協働してもらえる意味は大きい。自主的に食品テントを出店してくれるセイコーインスツル¹⁷や、若者向けファッション製品を寄付してくれる¹⁸スタートトゥデイ¹⁸など、幕張地域に立地する企業の全面協力は地域でも評判が高い。先に触れた「幕張新都心賑わいづくり研究会」においても企業が重要な役割を果たしているが、「新都心」としての幕張の地盤沈下を防ぎ、「新都心」としての魅力を高めることは、本学とも共通する利益であるといえる。のみならず、幕チャリへの協賛は、社員のボランティア活動や地域活動の振興の機会¹⁹ともなり、また、企業と学生・地域住民との理解が深まることで求人活動・就職活動にも役立っている。

こうして眺めてみると、どのセクターをとりあげても「Win-Winな関係」が成立していることは明確だろう。幕チャリには、こうした「Win-Winの連鎖」が構造的に組み込まれ

17 セイコーインスツル^株の場合は、幕張立地の本社が全面支援する形で、労働組合が主導的に役割を果たし、幕チャリに出店している。

18 ^株スタートトゥデイはベンチャーの成功例として著名であるが、社員が幕張地域に居住する場合には住宅補助の割増しをするなど、本社立地の幕張の振興に大きな関心をもっている。

19 海浜幕張に立地する大手企業では、社員に呼びかけて幕チャリへの寄付品を集めることも始まっている。また逆に、地域清掃などの社員ボランティア活動に幕チャリから学生が参加することも続いている。

ていると言ってよく、自分たちの行いが社会のため、人のためになっているという充足感が共通の原動力となっている。

2-3. フラットなネットワーク

幕チャリを特徴づけるもう一つの要素としては、「フラットなネットワーク」も見逃さない。その最も際だったものは、幕チャリの主催者である CUP そのもののあり方にある。

CUP が、「団体」というよりは、変幻自在な「ネットワーク集団」であることは先に述べた。政治的または宗教的な意図を持たない限り、本学学生であれば誰でもそこへの参加は自由で、かつ、離脱も自由である。会費もなければ、呼びかけはあっても指示はなく、全ては関わる者の自主性に任されている。対外的な代表や中心的に準備を進めるコア・メンバーはいるが、それらも自然発生的で、全て個人の意志によるものである。つまり、CUP はピラミッド型の従来組織ではなく、中心を持たない「フラットなネットワーク集団」²⁰と呼ぶべきもので、これまでの大学内組織には見られなかったものだ。

そうした集団の結成・運営を可能にしたのは、IT 技術の発達である。集団を繋ぎとめている基盤は E メールとインターネットである。幕チャリの趣旨に賛同する学生は誰でもメーリングリストに参加でき²¹、そこでは、いつでもどこでもメンバーと情報を共有することができ、部分的にしか役割を担えないメンバーでも全体の進捗状況を把握できて、自由に意見を述べることができる。会議の議事録は定まった様式で蓄積され、基本的な考え方のすり合わせ、キャッチコピーやデザインの検討、文書の添削、仲間の募集、進捗状況の報告など、全ての情報が公開されて、意思決定され、共有される。幕チャリの準備から完了に至るまでの期間（約 6 ヶ月）にメーリングリストを流れるメールが約 3,500 通にのぼることを見ても、メーリングリストがいかに重要な役割を果たしているかは明白だろう。と同時に、インターネット上にデータ・ストレージが設けられ、最終的な印刷物、発出文書、経理報告等のデータがストックされ、過去からのものを参照できるようにすることでノウハウの継承も行われている。従って、皆で集まって会合を行うのは、衆知を集めて議論するときか、仲間の実像を確認するためのコミュニケーションのためである。

こうしたバーチャルな形で CUP を運営しているからこそ、メンバーが 200 人という人数になっても対応できるわけで、また、「幕チャリ実現のために集まった神田外語大学生」という唯一の枠組みだけを基準に、全てのメンバーの対等性・平等性が確保され、自由な議論とお互いの意見の尊重を追求できるわけである。幕チャリの担い手に 1 年生や 2 年生が

²⁰ 指揮者がいないにもかかわらず、全員がリーダーシップを発揮することで優れた音楽を産み出す「オルフェウス室内管弦楽団」がリーダーシップ・マネジメントの好例として有名であるが、基本的な構造では幕チャリも似ていると言える。

²¹ 参加希望者とは必ず面談し、本人の特定をした上でメーリングリスト運用者の手で参加手続がとられるが、メーリングリストの脱退は、参加者の自由意思で自らの手続で脱退が可能となっている。

積極的に参加し、当日だけのボランティアでも気後れせずに参加してこられるのも、さらに、放っておいても幕チャリの後継者が毎年自然発生的に生まれてくるのも、CUP がこうした「フラットなネットワーク集団」であるからこそ、IT 技術の進歩のおかげである。

もっとも、こうしたバーチャルな集団にはリスクも伴う。学生の場合は、卒業や就職活動で顔ぶれが周期的に大きく変わることは不可避である。情報管理のずさんさや学外から影響を受けやすいといった弱点もある。また、これまでピラミッド型の組織しか体験したことのない人間にとっては、全員が同格という状況は不安で、一方へ引きずられたり、主体的に動かずに萎縮したりということも起こる。そうしたリスクを管理するために、メーリングリストの主宰者は教員（和田教授）が担い、メーリングリストの運営管理と必要なアドバイスがなされている。

このように主催者が「フラットなネットワーク集団」だという事実が幕チャリを性格づけているわけで、学内外を問わずに、幕チャリの趣旨に賛同する限りは誰に対しても門戸を開くという姿勢が幕チャリの基本精神となるのは当然であろう。その結果、幕チャリは学内、さらには学外の多種多様な組織とも自在に繋がり、巻き込んでいくこととなって、幕チャリ全体が「フラットなネットワーク」に支えられたムーブメントとなっていくのだ。

幕チャリの主催者が組織的に曖昧であるという批判を受けることがあるが、現実には逆に、個々人が対等に直結した柔軟さこそが幕チャリの強さの原点である。組織維持のために役割が振られて奉仕するのではなく、共通使命の実現のために各自が主体的に自分の役割を見出して貢献する「フラットなネットワーク」にこそ、幕チャリの本質がある²²。

2-4. 熱い想いの同心円

他方、いくら IT が発達したからと言っても、幕チャリの企画・運営はあくまでも「人」に依存している。幕チャリを支える「人」は大きく分けて、当日の「販売ボランティア」と準備の時点から一貫して関わる「コア・メンバー」に分けることができるが、幕チャリの成否を左右するという意味ではやはりコア・メンバーの存在が重要である²³。

コア・メンバーは数名から数十名ということが多い²⁴が、自分の時間を喜んで費やし、自分の持つ能力を惜しみなく傾けてくれるという意味では、「筋金入りのボランティア」と言ってもよいかもしれない。自ら名乗りを上げて、自主的に活動をするコア・メンバーを内面から支えているのは、「自分の力を試したい」「意味のある時間を過ごしたい」「自分を見つめたい」といったような学生らしい動機もあるが、なんと言っても「人の役に立ちたい」と

²² CUP を学友会傘下の愛好会や同好会にすべしとの意見に対して、これまで一貫して不同意で来たのは、この点にこそ論拠がある。組織維持が自己目的化することになったのでは、使命の全うが逆に霞んでしまうことになりかねないことを懸念しているのである。

²³ コア・メンバーには、権力者とならないように情報共有、フラットで話しやすい雰囲気作り、ボランティアの自主性の尊重等が求められている。

²⁴当初は 5 名程度であったのが、第 4 回以降は毎回 15 人以上がコアとして活動してきた。

いう「熱い想い＝使命感」である。コアに「熱い想い」がなければ、周囲のボランティアも内外の協力者も熱くはなってくれない。逆に、コアの情熱が心を打てば、仲間は自然に増えていく。やはり人を動かすのは人である。人が人を呼び、学生たちがリンクすれば、ボランティア集団が150人を越すほどまでに育つのに多くの時間は要しない。のみならず、学生の熱意は教職員、住民、企業人などへと伝わり、やがて地域全体にも波状的に伝わって、幕チャリの規模は同心円的に拡大していく。

幕チャリを特色づけるもう一つの点は、こうした「熱い想いの同心円」という構造にあると言ってよいだろう。それは「使命（ミッション）の共有が産み出す擬似的な共同体」に近いかもしれない。そして、その同心円のコアをなすのが学生であるがゆえに、学生の世代交代と共に、毎年、その想いは新規に更新されて新たに発熱する。いわば、自動的に更新・継続されていく仕組みが最初から内包されている同心円でもある。また、学生の若さゆえに、生み出されるエネルギーは爆発的で、しがらみのない学生が抱く「熱い想い」は世間的な損得関係から遠く、逆に周囲からの信頼と支援も得られやすいという利点も持つ²⁵。

このように、学生という存在の特性がプラス方向に作用し、力の結集と持続が力まずに確保されて、常に同心円状に再生産されていくのが幕チャリの大きな特色である。労働組合や学友会のような既存のピラミッド型組織の組織率が低下し、力の結集と持続に苦勞を伴っている現状に対して、使命を優先し共有する形で形成される幕チャリの同心円構造は新たな組織形態の可能性を示しているのかもしれない²⁶。

2-5. 大学を母体とする恩恵

学生が社会的に活動していくにあたって、大学を母体としていることは極めて有用で、その利点が積極的に活かされているのも幕チャリの特徴である。自分たちの足を使って協力者を増やしていく際に、大学を拠点とし、大学から事業が公認されている事実があるかどうかで、社会的な信頼度には格段の違いが生じる。人々の協力を得る上で、幕チャリにとっても、大学を母体とすることから得る恩恵は計り知れないと言ってよい²⁷。

のみならず、大学という場には毎年自動的に新たな人材が登場してくる。本学では毎年800人を超える新生が入学し、新たな人材プールが産み出されるが、これは幕チャリの人材確保にとっても非常に有難い環境である。ボランティア・グループやNPOにとって、「ボ

²⁵ と同時に、社会的訓練が十分でない学生が裏切られることも起こりうるが、そうしたリスクの管理にはOB/OGや教員のアドバイスが機能している。

²⁶ もちろん、幕チャリにとっても「使命（ミッション）の維持・継続」は常に可能かという課題が存在する。この点は、秋の浜風祭で小規模な幕チャリが開催されてコアが再生産されたり、寄付した売上が実際に役立てられているアジアの現場からのフィードバックが届いたりするなど、使命感継承の努力がなされている。

²⁷ 同様に、公民館や自治体広報などの協力を得る上で、千葉市や千葉県の後援も有用である。

ランティア人材のリクルートは大きな課題」²⁸とされているだけに、幕チャリが大学を母体とするメリットはここでも極めて大きい。しかも、そうした新たな人材は同窓生であり、スクラムを組むにあたってのリスクが最初から極めて小さい点も重要なメリットだ。

しかし、他方で、ボランティアの担い手が学生であるがゆえに、学生の経験者は必ず卒業していなくなり、「集团的記憶 (Institutional Memory)」は受け継がれていかないというリスクも生じる。この点は、前例主義に陥らないというメリットにもなり得るが、実は幕チャリの最大の弱みでもある。幕チャリに関われたとしても最長で大学生活 4 年間でしかなく、第 6 回 (2010 年) を迎えた今では、企画当初の想いやの過去の苦労話を語れる者はいない。それが原因で同じ失敗を繰り返すことや同じところで躓く可能性は常につきまとう。それだけではなく、当初のミッションから幕チャリが離れてしまう危険性さえある。こうしたリスクを回避する上で役立つのが、過去のメールやデータ、「進展ニュース」²⁹のレビューであり、経験者からの引き継ぎである。しかし、それに加えてインパクトを持つのは、幕チャリを第 1 回から傍で見守ってきた和田教授の中立的かつ教育的なアドバイスだ。とりわけ、理念の共有とチャリティの基本に関わるアドバイスは重要で、過去のノウハウの伝授と共に、得るものが極めて多い。のみならず、職務でないにも関わらず、幕チャリのボランティアの一人として学生と同じレベルで活動される姿には、「チャリティを自ら実践する」ことの意味を実感させられて共鳴するところが大きい。こうしたアドバイザーが損得勘定抜きに、教育者として常時背後にいてもらえるというのも、大学を母体とする大きなメリットである。

また、授業の合間をぬって活動する学生にとって、大学の中に活動拠点があるということも決定的に重要である。かつて幕チャリは、他団体と活動部屋を共同使用してきたが、2009 年からは「学生活動支援ブース」が大学の手で開設されて、大学のインフラ利用が大きく改善された。さらに、同年から「神田外語大学学生団体支援制度」も始まり、準備等のための資金活用にも道が開かれた³⁰。新たな枠組みで活動する幕チャリのような活動に対しても大学側の支援が明確化されたことは大きな恩恵で、物理的なメリット共に学生への大きな励ましとなっている。

さらに、幕チャリの問い合わせ窓口を異文化コミュニケーション研究所に引き受けてもらい、今も幕チャリの公式ホームページの維持管理をお願いしてきたことも大きなメリットだ。と言うのも、学生の活動では常に人が詰めているような体勢を作ることは不可能で、特に外部とのコミュニケーションには穴があきやすい。その穴を埋めてもらえるメリット

²⁸ 桜井政成著『NPOマネジメントシリーズ③ ボランティアマネジメント - 自発的行為の組織化戦略』ミネルヴァ書房、2007 年

²⁹ 大学事務局向けに幕チャリの進捗状況を伝えることを目的に、2~3 週間に一度のペースで、メールで「進展ニュース」を配信している。これは客観的な活動記録ともなっており、学生の新規メンバーにとっても参考にできる情報が非常に多い。

³⁰ 大学からの支援を全く受けられないまま孤立無援で始まった幕チャリの歴史からすれば、近年の大学の支援強化は画期的な進歩と感じられる。特に、理事長、学長、各部、学生課などからの協力と支援は年々拡大しており、大変ありがたい。

は信頼を繋ぎ止める上で重要である。また、公式 HP のアドレスが大学のアドレスとなる³¹ことで、対外的な信用を確保できている点も、特に自治体や企業などからの協力を拡大していく上で非常に役立ってきた。のみならず、オープンキャンパス、国際親善サッカー大会、開学 20 周年記念事業などの学内プロジェクトと連携できてきたことも、幕チャリの学内外での認知度を上げる上で大きな助けとなってきた。

このように、幕チャリを特徴付けるもう一つの要素として、大学を母体としてきたからこそ着実に成長し、その恩恵におおいに助けられてきたことを挙げなければならない。

2-6. 寄付金活用へのこだわりと共感

通常のチャリティでは、「どこどこの何のために」というように寄付金の使途があらかじめ限定されているか、抽象的に「社会福祉のため」と使途が一般化されているのが普通で、寄付者はその使途を疑うこともなければ、その実際の使われ方を後々までも問い続けることもない³²。しかし、幕チャリでは、そうした「寄付先を一方的に特定」する形や、「寄付してしまえば終わり」という形の寄付はしてこなかった。

その大きな要因は、まず、学生には社会や国際情勢に対する十分な知識がないことから、偏った知識で使途を決めてしまうことに躊躇があったことがある。むしろ専門家集団に託すことで、様々に寄せられる助成申請の中から助成の優先順位が高く、助成の意味が大きい案件を客観的に選んでもらい、実際の助成事業の実施プロセスもモニターしてもらったほうが、寄付金はより有益な形で活かされるのではないかと考えたのである。また、寄付を通じて他人を支援しようとする際、その支援は継続的で、当事者の自立を側面からサポートする持続的なものであるべきとも考えてきた。つまり、毎回思いついたように寄付先を変えていくのではなく、寄付する側も寄付金を活用する側も、ともにじっくりと向き合って持続的な関係が築ける相手を探すべきだと気付いたのだ。そうした関係を維持していく上では、寄付金が活かされる途中経過から事後報告までが完全に透明で、組織運営から経理まで全ての点でアカウントビリティが確立されている相手であることも不可欠となる。のみならず、幕チャリは公的存在である大学を母体としており、自治体や企業からの支援も受けていることから、寄付金の使途が政治的、宗教的、意図的であることは許されず、誰にも納得してもらえそうな枠組みが求められていた。それには寄付先の実績と社会的信頼が重要な尺度となる。さらに、外語大学だから国際貢献をしたいとの思いもあった。

こうして選ばれたのが、「アジア諸国の草の根の人々、NGO 等の自助努力に対して、資

³¹ 公式 HP のアドレスは「<http://www.kuis.ac.jp/icci/student/cup/top.htm>」であるが、対外的な信用を得る上で、大学を示す「[kuis.ac.jp](http://www.kuis.ac.jp)」が含まれていることは重要である。幕チャリは独自のブログ (<http://makuchari.makusta.jp/>) も持つが、公式 HP の信用度と機能は別物である。

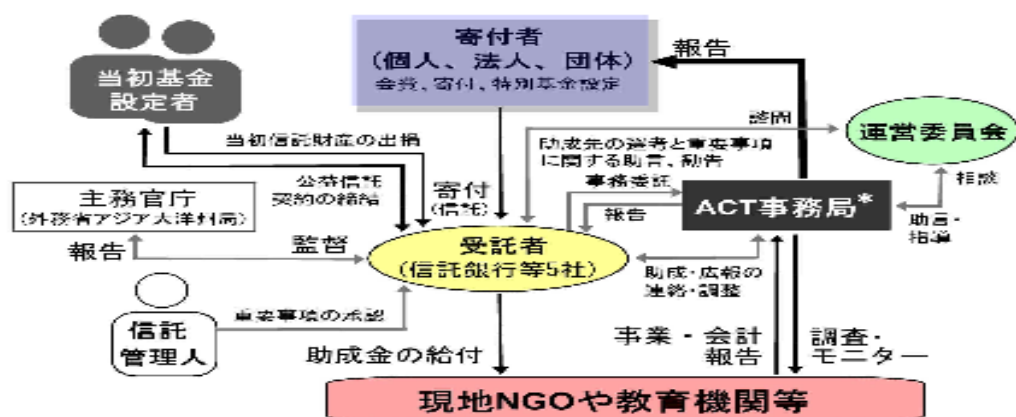
³² 典型は、特定国における地震救援や学校建設といった「特定目的」のものか、赤い羽募金のような「一般目的」のもので、その使途が最終的にどうなったかの報告を得られる機会は極めて少ない。

金援助を通して協力することを目的」³³に、日本で最初に設立されたコミュニティ型公益信託³⁴の「アジア・コミュニティ・トラスト Asian Community Trust(ACT)」である³⁵。

ACTは「日本国内で個人、団体、企業等によって設置された信託金を基礎に、アジア各国の現地NGOや教育機関などの事業を支援」しており、公益信託であることから、信託金は「信託銀行5行が管理し、信託金の使途については、アジアの開発問題の専門家により構成される運営委員会が決定」する形で極めて透明性が高い。1979年の設立以来、これまでの28年間にアジア12ヶ国において現地NGO等が実施する420件の事業を対象に、4億4,700万円あまり(1980年度～2007年度)の資金援助を行った実績を持ち、その事業は(1)農業の振興社会開発、(2)青少年の育成・教育、(3)医療・保健衛生、社会福祉、(4)自然環境の保護、人間環境の保全、(5)文化の振興、学術研究など幅広い分野に及ぶ。事務局は「アジア・コミュニティ・センター21(ACC21)」が務め、助成対象となるアジアの団体とプロジェクトに関する調査、援助事業のモニタリング、資料・報告書の作成などの諸業務を担っている。

募チャリからの寄付金も、この図5のような仕組みの中で活かされていく³⁶ことになっていった。この流れは一瞬複雑なように感じるかもしれないが、募チャリの寄付金は、専門家集団の手によって、より望ましいと考えられるプロジェクトに活かされてきたと言ってよいだろう。自分たちで自己満足的に寄付先を選ぶよりも、寄付金はより有効に活用されてきたと考えている。

図5



* 申請書の収集、事業発掘調査、モニタリング、助成決定に関わる資料の作成、助成先との連絡、国内での広報

³³ ACTのホームページ (<http://acc21.org/act/act-index.html>) より。以下引用は同じ。

³⁴ コミュニティ型公益信託とは、コミュニティに生活する人々や団体からの信託金(寄付金)に基づき、特別基金等を設置し、これら基金からの資金を使って必要な団体や事業を支援する仕組みのことをいう。

³⁵ もっとも、募チャリの第1回目ではここまで考え方が煮詰まっていなかったため、寄付先は身近な全国盲導犬施設連合会とされた。しかし、第2回以降は一貫してACTへ寄付されている。ただし、浜風祭で開催される小規模な募チャリでは、寄付先が異なる場合がある。

³⁶ ただし、もっかの低金利の中では信託基金から運用収入はほとんど生まれないので、募チャリの寄付金は信託基金とはせず、そのまま使い切りの形で事業費(助成金)に回されている。

過去における ACT のうち、幕チャリの寄付金が助成金として充当された対照事業の全体像は別掲資料の通りである³⁷。

2010年11月、幕チャリに参加した学生メンバーが ACT 事務局スタッフの引率でこうした助成の「現場」の一つであるカンボジアヘフィールド・ツアー³⁸を行った。筆者もそのツアーに参加したが、日本では実感できなかった幕チャリの社会的価値や重みを改めて認識することになった。「現場」では、幕チャリから ACT への寄付金が様々な形で活かされ、貧しい暮らしから抜け出せなかった人々に大きな変化を与えていたからだ。例えば、ACT の現地パートナーである NGO の「CEDAC (カンボジア農業開発研修センター)」は、多くの農家に SRI (集約的稲作法)³⁹の導入を勧めるプロジェクトを事業の一つとして行っていた。十分な知識がないまま独自に行われる農業は非効率的で、化学肥料の使用によって農民や消費者に害も及ぼす。しかし、SRI を選択することで安全なコメの収穫量が格段にあがり、収入が増え、貯金までできるようにもなる。農民たちは会合を重ねて、お金の貸し借りの仕方、利子などの様々なルールを自分たちで決め、自力で実践していた。このように農民が自ら仕事や暮らしに改良を加え、よりよい暮らしができるように自助努力をしている姿に触れられたことは感動的だった。のみならず、ACT が現地 NGO とタグを組み、草の根レベルで村の改善に取り組んでいる様子も勉強になった。助成する側が施しを与えるのではなく、現地の人々と共に悩み、改善していくことの重要性が再認識でき、自立型支援の重要性を再確認することができたからだ。自らできることが多くなると、村人たちは自力でどうにかしようとさらに努力を重ね、皆が生き生きとしていく。たくさんの人々の手を経て集められた幕チャリの売上金が、本当に必要とされているところに間違いなく使用されている「現場」を実見できて、幕チャリが自分たちの想像を超えた重要な意味を持っていることを改めて噛みしめることになった。

幕チャリを特徴付ける最後の要素は、寄付金の使い道における自己満足を排し、透明性とアカウンタビリティを確保しながら、専門家集団の力を借りてより有効なプロジェクトに寄付金を活かし、当事者の自立支援を持続的に確立するという「寄付金活用へのこだわりと共感」にある。ちなみに、過去 5 回の幕チャリを通じて ACT に寄付された総額は約 740 万円にのぼるので、貨幣価値を考えた場合、金額としてもアジアでインパクトを持ちうる貢献ができてきたのではないだろうか。

³⁷ http://www.kuis.ac.jp/icci/student/cup/act_list.pdf 参照。対象事業を選定中で助成金が未交付の所があるため、記載された助成金総額と幕チャリからの寄付金総額は一致しない。

³⁸ <http://www.kuis.ac.jp/icci/student/cup/report/tour2010.pdf> 参照。2010年11月25日～29日の訪問先は、カンポット州「CEDAC」事業地域(2009年度までのACT助成事業)とコンポアンチュナン州「CEDAC」事業地域(2010年度からのACT助成事業対象地)の農民協会、精米組合、農地(実践現場)、「FLD」事務所、トンレサップ湖 Prek Toal 村と Kompong Prohoc 村などである。

³⁹ CEDAC が組織化の仲介支援をしている農民協会 (Farmer Association: FA) を通じ、カンボジア全土で普及・推進している技術。この農法により、効率的に安全なコメの生産が可能となり、1ヘクタール2トン未満の収穫だった土地でも6～8トンの収穫が可能になる。

第3章 幕チャリに内在するダイナミズム

前章では幕チャリを特色づける構成要素について述べてきた。これらの要素を眺めるだけで、構造的に幕チャリが発展性と持続性を内包した仕組みだということは理解できるだろう。しかし、これらの要素はいわば「システムの構造デザインと構成パーツ」であって、これだけでは、幕チャリが機能し、自律的に発展し、継続してきたことのすべてを説明したことにはならない。なぜなら、幕チャリを動かしてきたのはあくまでも生身の人間であって、そうした人々を突き動かしてきた内発的な動機、いわば「システムを駆動させてきた内発的なエネルギー」にまで立ち入らないことには、幕チャリの全体像を解明したことにはならないからだ。そこで最終章では、そうした担い手、特に学生の一人一人を突き動かしてきた内発的な動機を、幕チャリに内在するダイナミズムとして見ておきたい。

人々が幕チャリに関わる動機は、利益追求欲でも、支配欲でもない。幕チャリは組織を持たない「ネットワーク集団」が母体であり、参加も離脱もいつでも自由なボランティア活動が本質である。拘束も見返りもない中で自主的に献身することが本質であるわけだから、それでも人々が参画する動機はあくまでも内発的なもので、それはまさに人間が本来持っていると考えられる「自己実現の希求」に尽きるのだと思う。

ここでは、論議をよりわかりやすくするために、経営学などでも援用されるエイブラハム・マズローが提唱した「欲求段階説」⁴⁰を援用して考えてみることにする。マズローは、常に何かを欲し続けるのが人間の特徴であるとし、人間が無意識的に希求する基本的な欲求を「生理的欲求」「安全の欲求」「所属の欲求」「承認の欲求」「自己実現の欲求」の5段階に分類した。人々は生理的欲求から段階的に欲求が満たされ、より低次のものから高次のものへと充足度をあげるべく行動するという。だとすれば、「生理的欲求」「安全の欲求」の二つはすでに満たされていると考えられる今日の日本では、人々が追い求めるものは「所属の欲求」の充足から「承認の欲求」の充足を経て「自己実現の欲求」の充足に至る「充足の進展」だと言ってよいのだろう。

このことは、幕チャリにも当てはまるはずだ。より高次の欲求の充足を望んで行動を起こし、そのなかでダイナミズムが生まれ、さらなる発展・持続へと展開していく。幕チャリが担い手の再生産に事欠かず、一貫して発展と継続を実現してきた事実は、こうしたダイナミズムが幕チャリにも作用しているということではないだろうか。

3-1. 「所属の欲求」の充足

まず、マズローのいう「所属の欲求」から考えてみよう。これは、換言すれば「他者に

⁴⁰ エイブラハム・マズロー『人間性の心理学 モチベーションとパーソナリティ』（小口忠彦訳）産能大学出版部、2003年

受け入れられている、どこかに所属している」という実感の体得を追い求めることである。

大学生にとっての「所属」となれば、まずもって大学そのものに所属意識を抱くかどうかということになる。学生が、入学した時点ですでに大学に明確な所属意識を持っていることは多くないだろう。大学への所属意識は、むしろ、入学してから形成される方が普通だと思われ、その意味では、推薦入学の中のごく一部の学生を別にすれば、本学に入学して来た学生も大差ない。だとすれば、大学生活における「所属の欲求」は、入学後に何に関わり、どういう大学生活、交友関係を築くかで、その充足度が大きく異なってくることになる。

朴容寛によると、ネットワーク型組織とは「自律的な部分が網状でつながり、全体のアイデンティティを保ちながら相互作用している統一体のうち、一つの主体として自らまとめられた意思決定が可能で、ある方向に向けて調整されているもの」⁴¹であるという。これに対比されるのはヒエラルキー組織で、朴は「ヒエラルキー組織とは特定の目的を達成するために合理的かつ効率的にデザインされ、没人格的に運営される他者管理システムである」と定義している。つまり、自律的な個人が網状につながり、意思決定を組織全体で行うネットワーク型組織は、効率性を求め特定の者が意思決定をし、下の者に命令を下すヒエラルキー型組織とは全く異なる組織体系なのである。

この定義にもとづけば、幕チャリは間違いなくネットワーク型組織である。趣旨に賛同すれば誰でも自分の意思でネットワークに加われ、仲間と共に自由に企画・運営ができる。集団は常に開放されていて、人間関係は対等で、参加も離脱も自由で、自分の才覚を自由に開花させられ、ネットワークは24時間稼働している。

「所属の欲求」の充足を求めたとき、ピラミッド型組織よりもこうしたネットワーク型組織が好まれることは当然だろう。ネットワーク型組織では、自分の意思で呼吸できる空間が遥かに大きいからだ。社会全体でピラミッド型組織の崩壊が指摘され、ネットワーク型への移行が起こっていることは衆知の通りだが、若い世代が中心を占める大学でそうした志向性がさらに強くても何ら不思議はない。しかし、現実の大学では、クラスにしる、学友会にしる、部活にしる、基本形はピラミッド型ばかりで、そうした自由度の高い開放的な空間はほとんどない。そうした中で、従来の大学にはないネットワーク型組織の幕チャリがその「受け皿」として機能しているのではないだろうか。

マズローは、低次2つの欲求の両方が十分に満たされた人には「所属の欲求」が現れ、所属する集団における位置を切望し、この目標達成のために一生懸命努力することになる⁴²と述べている。つまり、幕チャリに参加する学生も無意識的に「所属の欲求」の充足を求め、CUPというネットワーク集団や神田外語大学、さらには幕張という地域コミュニティの中での位置確認を切望し、前向きな努力がされているとすることができるだろう。幕チャリのダイナミズムの原点はここにあり、この「所属の欲求」が現代社会や若者の志向

⁴¹ 朴容寛著『ネットワーク型組織論』ミネルヴァ書房、2003年

⁴² マズロー前掲書, p68

に適合する形で充足されるところから幕チャリが始動するのだと考えられる。

3-2. 「承認の欲求」の充足

「所属意識」の欲求の次に、幕チャリで学生が求め充足されるのは「承認の欲求」である。この「承認の欲求」は、安定したしっかりした根拠をもつ自己に対する高い評価、自己尊敬、あるいは自尊心、他者からの承認などに対する欲求・願望のことで、ごく一部の例外を除いてすべての人々が持っているものであるとマズローは言う⁴³。問われるのは、各自の主体性であり、同時に、お互いを尊重しあう連携の意思である。そして、この「承認の欲求」は学生だけでなく、幕チャリを支援し、幕チャリに参画してくれるすべての人々へも波及していく。

再び朴の言葉を借りるならば、ネットワーク型組織における参加者の主体性は「分権性」によって保障される。権限が集中されず、全ての人々に権限が委譲されていることが重要で、誰かに指示や命令をされるのではなく、各人に権限が与えられると同時に責任も問われることが必須条件である。支配・服従の関係ではなく、ピア・ツー・ピアの関係、あるいはパートナーシップの関係が確立されているか否かが鍵だと言い換えてもよい。そして、そうした関係が確保されると、自律的な個人は、自らの裁量権を活かして、「承認の欲求」、つまり他者に認められたいという欲求を満たすために努力を始め、他者から評価を得ようとする。それは人間に備わっているごく自然な行動といってよいだろう。

ネットワーク型組織である幕チャリでも、当然、同様のことが発生し、連鎖する。他者から強制されるのではなく、自分の意思のもとに行動した結果を第三者に認めてもらえれば、「承認の欲求」の充足といってもその充足度が違う。自分の存在意義を再確認することができ、自分の行為に対して使命感まで感じるようになる。現代の若者は、バーチャルには繋がっているように見えても実は孤独で、対人関係の形成も下手だといわれているが、幕チャリでは、そうした孤独感を乗り越えて連帯し、積極的なコミュニケーションを通して対人関係を大きく発展させることが不可欠だ。この挑戦に打ち勝つことで、集団から認められて尊重されるようになり、さらに、自分に対する自信も生まれてくる。幕チャリにおける「承認の欲求」の充足は、“自分がやるべきことがある”という使命感と責任感、そして“自分にもできることがある”という自信と充実感を学生にもたらしていると言えるだろう。このことは学生以外の参加者においても同様である。

こうした充足を一度味わうと、次にはより大きな責任を伴う仕事を引き受け、さらに望ましい形で使命を全うしようという思いも自然に湧いてくる。それゆえ、ボランティアをした1年生や2年生の中から、次の幕チャリのコア・メンバーが自ら名乗り出て、後継者が自然に生み出されてくる。また、幕チャリには個人の思いのレベルに合わせて参加でき、誰もが何らかの形で充実感を味わうことができるため、1年生の時から4年生の時まで4

⁴³ マズロー前掲書, p70

年にわたって関わり続ける学生も少なくない。

幕チャリは、関わる全ての者が自分を「主役」だと認めることができる関係性の上に成立している。それは、「誰かに認められたい」という思いと「誰かの役に立ちたい」という思いの両方が満たされることを意味しており、幕チャリのダイナミズムはそうした「承認の欲求」が充足される中でさらに強力なものとなっていく。

3-3. 「自己実現の欲求」の充足

最後にやって来る欲求は、「自己実現の欲求」である。マズローはこれを、自分自身の本性に忠実であり、自分になりうるものにならなければならないという欲求であると表現している。また、こういう自分でありたいと人が潜在的に持つものを実現しようとする自己充足への願望であり、すべての行動の動機がこの欲求に帰結されるようになる⁴⁴と説明している。この欲求には終わりがなく、求めるレベルが高いほどその欲求は満たされることがない。

では、幕チャリにおけるこの最終的な欲求とは何を意味するだろうか。幕チャリでは参加者は自分の関わる範囲を自由に選べるので、自己実現と言ってもその目指すところは様々だろう。多くの友達を作り大学生活をより楽しい時間にしたい、社会人としてのスキルを身につけ就職活動に活かしたい、新たな自分の能力を開発したいなど、何でもありとってよい状態に近いと思われる。だが、少なくとも一つ、間違いなく全員に共通している欲求も存在している。それは「社会のために役に立ちたい」という欲求である。

内閣府の「社会意識に関する世論調査」⁴⁵によると、「社会の一員として、何か社会の役に立ちたい」と思っている人は65.2%、3人に2人という多さである。特に20代・30代での割合は、2006年に比べて2010年には10ポイント近くの増加を示している。2004年に誕生した幕チャリは、まさにそうした社会意識の変化を体現してきたと言えるだろう。

「社会のために役に立ちたい」という希求には終わりがなく、それは変わりゆく自分自身と変わりゆく社会との関係性に影響され、その関係性自体も絶えず変化するからだ。しかし、人々は、あらゆるものがどんなに変化しようと、社会の構成員として社会に関わり、社会の役に立ちたいという思いを常に持ち続ける。それゆえ、終わりのない、いつまでも完全に充足されることのないその希求は、伏流水のようになって人々を突き動かしていくことになる。ボランティア精神やチャリティの原点は、ここにあるのだろう。

幕チャリの最強のダイナミズムは、まさにこの「社会のために役に立ちたい」という希求を最大かつ共通の基盤としているところから生まれているのではないか。一つになった思いが幕チャリというプラットフォームに集束されて、とてつもないパワーが出現する。それは「自己実現の欲求」の充足を求める人々の努力の集積でもあると言ってよい。しか

⁴⁴ マズロー前掲書, p72

⁴⁵ <http://www8.cao.go.jp/survey/index-sha.html>

し、同時に、その充足はどこまで行っても完結しない。それゆえ、やがて、そこからさらなるダイナミズムが生まれて、幕チャリの「継続と発展」が不可避となっていく。換言すれば、永久不滅ではないだろうが、幕チャリには永続的に自己展開し続けても不思議でないダイナミズムがもとより内包されているのだ⁴⁶。

先にも触れたが、2010年11月に支援先の一つであるカンボジアへのフィールド・ツアーが実現し⁴⁷、筆者も参加した。そして、その「現場」で、自分がアジアの仲間の役に立てたことを初めて実感することができた⁴⁸。幕チャリを開催して売上を寄付すると、幕チャリの参加者には「フィニッシュ」という達成感が無意識に生まれてしまうが、実際にその寄付金を使って自立を始める支援先の当事者にとっては、それは「スタート」に過ぎない。そのことは頭でわかっているが、長い間どうしても実感できなかった。しかし、今回のツアーで支援先の人々と直接触れ合えたことで、改めて「社会の役に立ちたい」という自分の希求の一部がそれなりに達成されていたことに気づき、幕チャリの意義を再確認することができた。そして、少し自己実現もできたであろう自分を誇りに思うことができた。のみならず、次は支援先のカンボジアの人々が自己実現を目指す番だ、その機会を幕チャリは引き続き提供できるのだということにも気づき、今後も幕チャリの継続と発展が不可欠であると意を強くした。

たしかに「自己実現の欲求」には終わりが無い。であるがゆえに、それがプラスに作用する限りは、チャリティの精神は絶えることがないのだと感じる。最も高次な欲求とされる「自己実現」の希求が、よい意味で今後も幕チャリの牽引力となり続ける限り、さらに幕チャリが継続し、発展していく可能性は極めて大きい。

以上、マズローの分類に従って、幕チャリにおける「所属の欲求」の充足、「承認の欲求」の充足、「自己実現の欲求」の充足の有り様を見てきた。そこでは、より高次な欲求の充足を望んで行動が起こり、そのなかでダイナミズムが生まれ、さらなる発展・持続へと展開していく「充足の進展」が間違いなく見て取れる。

幕チャリの持続可能性を考える際、やはり、こうした人々を突き動かしてきた内発的な動機、つまり「システムを駆動させてきた内発的なエネルギー」の有り様は決定的に重要である。大学という環境のもとに、社会のために役に立つという使命を掲げた幕チャリだからこそ、そうしたエネルギーが枯渇せずに常に再生産され続けることが可能なのだ。

そうした好条件が幕チャリの環境と使命には内包されていると言ってよく、そこにこそ、幕チャリが持続可能な社会貢献システムになりうる大きな鍵が存在している。

⁴⁶ もっとも、人は同じことに飽きてくるので、幕チャリの継続には担い手の更新が欠かせない。その点では、毎年新入生が入ってくる大学という場合は、継続性に非常に適した環境と言える。

⁴⁷ これまでもフィールド・ツアーの要望は出ていたが、実現できてこなかった。今回はACC21の全面協力で実現にこぎつけたが、幕チャリが支援先に及ぼす変化をようやく目にできる地点まで到達したことは感慨深い。

⁴⁸ 詳細は別添資料2の「カンボジアフィールド・ツアー報告書」参照。

おわりに

これまで見てきたように、持続可能な社会貢献システムを考えていく上で、幕チャリには参考となる多くの鍵が内在している。

第1章で概観したように、幕チャリの発展には「外からの支援」と「内からの改善」といった後押しが大きな役割を果たしてきている。そうした支援なしには幕チャリの規模と運営の拡大は望めなかつたろう。これらには無条件に感謝する必要がある。協力し、育て、参画してくれる「内外との連携」があったからこそ、幕チャリは目に見えて大きくなっていった。こうした「連携」は重要な鍵の一つである。

しかし、幕チャリを絶えず成長する運動体として見た場合、鍵はそれだけにはとどまらない。第2章で見たように、幕チャリが発展し、持続的に展開してきた基盤には、幕チャリというシステムを構成する固有の構成要素が不可欠である。それらはいわば「システムの構造デザインと構成パーツ」とでも呼ぶべきもので、幕チャリを特徴づけるだけでなく、持続可能な社会貢献システムをデザインする上で極めて重要な鍵となるものである。

のみならず、第3章で述べたように、人々を突き動かしてきた内発的な動機、いわば「システムを駆動させてきた内発的なエネルギー」も鍵として忘れてはならない。なぜならば、持続可能な社会貢献システムを動かしていくのは生身の人間であり、そうした人々の内発的な動機がダイナミズムとして常に渦巻いていることが活力の元であるだからだ。

以上のことを総合してみると、持続可能な社会貢献システムを考える上では、「内外との連携」「システムの構造デザインと構成パーツ」「システムを駆動させる内発的なエネルギー」の三つが揃っていることが不可欠だと言えるだろう。プラットフォームとしての「場」が設定され、これらが相乗的に機能していることが、持続可能性の鍵なのである。そうした観点から眺めてみると、大学という環境のもとに、社会のために役に立つという使命を掲げた幕チャリは、持続可能な社会貢献システムとして今後も発展する可能性をおおいに秘めている。「幕張」という特殊な地域構造と立地が、幕チャリの持続開催の大きな手助けとなっている点はあるが、幕チャリは他大学へも「輸出」しうる可能を秘めたビジネスモデルだとも言えるのではないか⁴⁹。

幕チャリの本質を一言で繰り返せば、「みんなで心を合わせて半歩だけ踏み出すチャリティ」であり、「楽しみながらできる気軽なチャリティ」である。しかし、たとえ半歩の社会貢献であっても、途上国にとっては何倍もの貢献となる。一人一人が半歩ずつ歩み寄れば、海を越えた仲間の生活を間違いなくよりよいものに変えることができるのだ。

現に筆者は、その現場を見て、その意味を実感してきた。幕チャリが公益信託 ACT を通

⁴⁹ 実際に、幕チャリは一度だけ獨協大学で実施されたことがあり、立教大学からも導入可能性の打診も来た。中長期的には、全国の大学に幕チャリを展開して連携することも十分に考えられ、ACT では新しいファンドレイジングの方式として注目もされている。

して現地 NGO を間接支援し始めてから、人々の生活レベルは格段によくなった。今まで生きることでギリギリだった家族が、よりよい暮らしを求めて仕事に励むことができている。栄養のあるご飯を食べられるようになり、貯金もできるようになった。

たとえ半歩でしかなくとも、踏み出すことで、世界は少しずつ変えられる。何もしないよりは、半歩だけでも踏み出すべきだ。小さな力の繋がりで大きな力を引き起こすムーブメントとして、今後も幕チャリが継続・発展していくことを願ってやまない。